

－ わたしのエスペラント人生－

長崎にエスペラントを伝えたミスレルの生誕地を訪ねて

盛脇 保昌（長崎県）

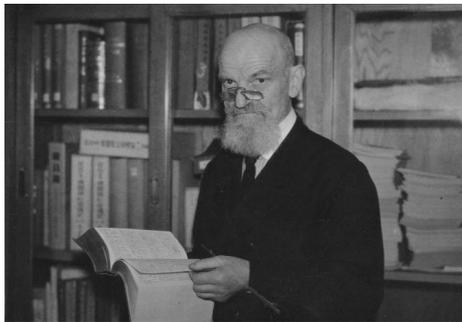
1 エスペラントと私

私は、広島で生まれた。千羽鶴で有名な「原爆の子の像」を平和公園に建立するきっかけとなった佐々木禎子あきこさんの母校、のぼりまち 幟町中学校に入学した。在学中に世界エスペラント大会が初めて日本で開催されたことから、エスペラント運動が各地で盛んになり、幟町中学校にもエスペラントクラブができていた。3年生のときに、そのクラブのことを知ったのが、私の初めてのエスペラントとの出会い。しかし、このときはエスペラントクラブには入らなかった。その後、広島大学に入学し、2年生のときにエスペラントクラブに入部した。入部の動機は、外国語に興味があり、その一つとしてかじってみようとの軽い気持ちだったが、そのクラブは、RH（Rondo Harmonia：国際語教育協議会）に属し、活発なエスペラント運動を展開していた。運動にも参加し、関西各地を訪れた。卒業し、就職した会社で長崎に配属になったことから、長崎エスペラント会に所属し、現在に至っている。今回、長崎にエスペラントを伝えたミスレルの生誕地を訪ねることができたので、そのことについて報告したい。

2 ミスレルについて

ミスレル（Alphonse MISTLER）は、1873年フランスのタンネンキルヒ（Thannnenkirch）生まれのフランス人。

1892年マリア会に入会、修道士となる。ザメンホフと交流のあった兄ジャン（Jean）にエスペラントを勧められて学ぶ。1893年、長崎に派遣され、海星学校で物理、化学の教師に。そこでエスペラント講習を実施し、1902年、英字新聞の長崎プレス（Nagasaki Press）にエスペラントについての記事を寄稿。それを黒板勝美が読み、日本にエスペラントを広めるきっかけとなった。1934年横浜へ移り、日本に帰化し、日本名を、みつてる 光照三郎とした。1953年没。墓は、横浜の外国人墓地にある。



3 ミスレルのエスペラント記事発見

私は、現在、長崎市の隣の諫早市に住んでいる。それを知った東京の小林司さんから、2003年3月、「ミスレルが長崎プレスに寄稿した記事を探してほしい」との依頼があった。長崎県立図書館で長崎エスペラント会会員の西宣子さんと二人で長崎プレスを手分けして探した。約10cm幅のフィルムを専用の表示装置に取り付けて表示し、探していった。仕事があるので、土日

だけの作業。4月20日に1902年の11月26日号に載っているのを見つけた。小さな目立たない記事なので、見つけにくいものだった。すぐに、小林さんへ連絡し、これを今では多くのエスペ란ティストが利用している、ERAJというメーリング・リストへも報告した。

4 日本大会での研究発表

2004年10月、犬山市で日本エスペラント大会があった。JEI（日本エスペラント学会）研究発表の一つとして、上記の記事発見のことを含め、「エスペラントが日本へきた道—特に長崎」と題して、小林さんと共同で発表した。

小林さんにリードしてもらい、ミスレルについての部分を何とか発表した。日本人のみの出席者だったので、日本語での発表だったが、日本大会での研究発表は初めてであり、緊張し、十分な説明ができなかったことは、残念に思っている。

このときの研究発表資料は、今でもJEIで購入できるので、興味ある方は、一読していただきたい。

5 ミスレルの生誕地訪問、親族と会見

ミスレルのことを調べるからには、「いつか、彼の生誕地を訪ねたい」と思っていた。2008年の7月末から8月初めにかけて、やっと行くことができた。

2003年、小林さんがフランスのデレギーートで高校のドイツ語教師のエドモンルートヴィヒ（Edmond Ludwig）さんから、「ミスレルの生誕地は、ドイツ国境に近い、ストラスブール（Strasbourg）近くの小さな山村のタンネンキルヒだ」ということを

連絡してもらっていた。2008年7月、初めてルートヴィヒさんへメールを出し、「タンネンキルヒへ連れて行って下さい」とお願いした。彼はすぐに快諾してくれた。

2008年7月28日、成田発で初めてのヨーロッパへと旅立った。パリ経由で7月31日にストラスブールのホテルに泊まり、翌8月1日にストラスブールの近くのセレスタ（Sélestat）駅でルートヴィヒさんと合流した。セレスタ駅に停めてあったルートヴィヒさんの車で一路タンネンキルヒへ。そこは、山の中腹の小さな村。村の入口には、観光案内を兼ねた標識。人形も置いてあり、おとぎ話の世界へ入るような感じ。家やホテルには、多くの花が飾ってある。



村のかなり高いところにミスレルの11人の兄弟の内の一人（Albert）のお孫さん家族が住んでいる家があり、そこに連れて行ってもらった。訪ねたのは、金曜日。家族は、別荘として使っていて、「週末しかない」とのこと。ちょうど、週末だったので、奥さんのアン（Anne）さん、その息子さんのティマーシャル（Timarchal）さんに会い、家の中に入れてもらった。やさしい人たちで、私たちをコーヒーとお菓



子で歓迎してくれた。

奥さんがミスレルの兄弟の孫ということだが、たまたま旦那さんもミスレル姓だったので、今もミスレル姓のままだとのこと。長崎へ行ったミスレルについては、ご存知なく、エスペラントも話せないので、私が持参したミスレルの写真とその説明をルートヴィヒさんに頼んでフランス語に訳してもらった。奥さんたちは、興味深く見られていた。ベランダで記念写真を撮り、会ってもらったお礼を言って、ミスレル邸を後にした。この家でミスレルが生まれたのかどうかは分からなかったが、この地、このような家で生まれ、育ったのだろう。



その後、タンネンキルヒ村の中を見て回り、教会の敷地内にミスレルと書かれた墓を見つけた。これが、長崎のミスレルの親類のものなのかもしれないが、確認はでき

なかった。

タンネンキルヒ村を含むストラスブールなどのドイツ国境の地域は、歴史的にフランス領になったり、ドイツ領になったりを繰り返してきた地域である。この地がドイツ領になったときの小学校での最後のフランス語授業について書かれた、アルフォンズドーデ (Alphonse DAUDET) の「最後の授業」は有名である。ドイツ領になるとドイツ語を強制されただけでなく、キリスト教についても、強制された。フランスがカトリックなのに対し、ドイツがプロテスタントなので、プロテスタントに改宗することを嫌って、この地を去っていった人もいたことをルートヴィヒさんから聞いた。

この静かで落ち着いて穏やかな山村でも言語問題や宗教問題があったことが、ミスレルを世界共通語のエスペラントに向かわせたのかなと想像した。

タンネンキルヒ村を後にして、ルートヴィヒさんは近くのおとぎ話に出てくるような古い町並みを残しているエギスアム (Eguisheim) に連れて行ってくれた。ここでもほとんどの家に花が飾ってあり、とても気持ちよく感じた。その後、もっと大きなコルマル (Colmar) も案内してもらい、古い建物や運河を見学し、ルートヴィヒさんとはコルマル駅で別れた。

ミスレル生誕地訪問が実現し、よかったという思いと共に、エスペラント仲間との強いきずなを感じた旅だった。

(resumo) Mi gvidate de s-ro Ludwig vojaĝis al Thannnenkirch, kiu estas naskiĝloko de s-ro Mistler, kiu enkondukis Esperanton en Nagasaki. Kaj mi renkontis nepinon de la frato de s-ro Mistler. (MORIWAKI Yasumasa)